

朝鮮語の時間的遠近の明示形式にみられる概念的特徴

川畑 祐貴

【要旨】 本稿は、朝鮮語の時間的遠近の明示形式を対象として、時間的遠近が時間領域以外の概念領域とどのように関連するのかを概念メタファー的視点に立って明らかにする。時間的近さを明示する時間副詞 *kot*、*palo*、*mak*、*kas* を調べたところ、*kot* と *palo* の意味はそれぞれ形容詞 *kotta* と *paluta* などにおける空間的直線性が時間領域や論理領域に転写されたものであると分かった。時間副詞 *mak* は様態副詞 *mak(wu)* の様態修飾機能によって生じる事態展開における時間間隔の短さが時間的近接性へと転じたもの（川畑 2024b）、時間副詞 *kas* は空間名詞 *ka*（< 中期朝鮮語 *kos*/*koz*）における空間的な境界近傍性が時間領域における時間的近接性へと転じたものであると考えられる。^{*}

【キーワード】 時間指示, 概念メタファー, 文法化, 形容詞, 非対称性

1 はじめに

言語学は、実にさまざまな言語現象を研究対象として扱うが、時間表現もその対象の一つである。近年は時間表現に対して、認知言語学的なアプローチがとられる場合が少なくない。特に、概念メタファー (conceptual metaphor) は時間表現の分析における説明理論として、その効果を示してきた。概念メタファーとは、概念領域 A を異なる概念領域 B を通じて理解することであるが (Lakoff and Johnson 1980, 1999)、時間表現に関する概念メタファー研究では、たとえば (1) のような例が分析対象となる¹。

- (1) a. 時は金なり (Time is money)。
b. クリスマスが近づいている (Christmas is approaching)。
c. この先の人生

^{*} 本稿の執筆にあたり、2名の匿名査読者、葉晨傑氏、立命館大学の移動・空間・時間研究会のみなさまから貴重なご意見をいただいた。記して感謝申し上げる。また、編集長の王丹氏をはじめ、第43号編集委員のみなさまにも感謝申し上げます。

¹ 時間表現に対する概念メタファー分析がこれまで発展してきたのは、時間が抽象概念であることが影響していると思われる。抽象概念である時間を認知する上で、なんらかの他の具体概念を介し、それが言語表現に現れる場合があるということである。

(1a) では、時間が「金」と同等の価値をもつことを、「金 (money)」の言語形式を用いることで表している。(1b) では、時間の経過を「移動」になぞらえ、発話時(話者のいる時点)とクリスマスとの時間的位置関係の変化を「近づく (approach)」という空間表現によって表している(虚構移動 *fictive motion*)。(1c) では、未来を「先」という空間的な方向名詞で表している。(1) で挙げた「金」や「移動」以外にも、時間を捉えるメタファー的方法は個別言語的、また通言語的に多様である (Haspelmath 1997, Heine and Kuteva 2002)。

時間表現に対する概念メタファー的研究は豊富な成果を残してきたが、課題もある。そして、その課題は本稿で扱う「時間的遠近」とも関わるものである。本稿では時間的遠近への関心の下、朝鮮語の時間的遠近の明示形式を対象に、時間的遠近が時間領域以外の概念領域とどのように関連するのかを概念メタファー的視点から明らかにする。

本稿の構成は次の通りである。研究の対象と目的について述べた 1 節に続き、2 節では、「時間指示」について述べた後 (2.1 節)、「時間的遠近」という概念および現象に対する概説を行なう (2.2 節)。3 節では時間的近さを明示する朝鮮語の時間語彙 *kot*, *palo*, *mak*, *kas* を取りあげ、概念的特徴に関する分析を試みる。最後に 4 節で本稿の内容をまとめ、今後の課題を述べる。

用例などの引用に際して、引用箇所右下部に出典を明記する。なお、特に断りのない場合は筆者による作例である。朝鮮語のローマ字表記には S. E. Martin による Yale 式ローマ字表記を用いる。

2 時間指示と時間的遠近

2.1 時間指示 (temporal reference)

事態は、時間的 (temporal) もしくは超時間的 (atemporal) な性質を持ち、時間軸に対して何らかの位置関係を有する。事態の時間的な位置関係を捉える現象は、しばしば時間指示 (temporal reference) と呼ばれ、言語学の研究対象の一つとされてきた。そうした時間指示の研究において、分析対象として扱われることが多かったのが時制 (tense) である。時制とは、事態を時間軸に位置付けるための形態統語論的な文法範疇 (grammatical category) である (Comrie 1985, Dahl 1985 など)。言語学の発展に貢献してきた印欧語において時制体系は文法的に重要な役割を担う傾向にあること (Klein 1994: 16)、世界の少数言語の記述において時制形式に対する実際の分析の必要性があること (Cover 2015, Cover and Tonhauser 2015) などから、時制はこれまで多くの関心を集め、実際にさまざまな成果を残してきた。しかし、時間指示現象の全体像を把握するという視点に立った時、分析対象が文法範疇である時制に偏ることには問題がある。

一つ目は、世界には時制を持たない言語が存在することである。いわゆる無時制言語 (tenseless languages) がこれに該当する。WALS (the World Atlas of Languages Structures) Online によると、地域や言語系統がさまざまな 222 の言語の中で、過去時制標識を持たない言語の数は 88、未来時制標識を持たない言語の数は 112 で、過去標識と未来標識をともに持たない言語の数は 53 である (Dryer and Haspelmath 2013)。時間指示研究は、1990 年代後半以降の無時制言語に対する関心の高まりに伴って一層の発展を見せた (Baker and Travis 1997, Bohmeyer 1998, 2002, 2009 for Yucatec Maya, Bittner 2005 for Kalaallisut, Lin 2006 for Chinese, Matthewson 2006 for St'át'imcets, Mucha 2013 for Hausa, Tonhauser 2011 for Paraguayan Guaraní など)。無時制言語の存在を考える上で重要となるのが、時制標識を持っていないでも、時間指示自体は行なうことができる点である。無時制言語における時間指示の研究が進むにつれて、時間指示現象における時制の重要性は相対的に低くなり (Klein 2009: 51, Tonhauser 2015: 138)、それと同時に、時制以外の表示方法に対する関心の乏しさと研究の必要性が指摘され始めた (Klein 2009: 41)。

二つ目の問題が、上述のように、時間指示の機能を果たすのは文法的な時制だけではないことである。時制以外に、時間副詞 (temporal adverbials) や文法アスペクト (grammatical aspect)、動詞や形容詞などによる語彙アスペクト (lexical aspect; Aktionsart)、モダリティ (modality)、文脈 (context) などの語用論的要素が時間的位置の表示に関与する (Comrie 1985, Dahl 1985, Klein 1994, 2009, Tonhauser 2015 など)。それら複数の要素が合わさることで、事態の時間的位置づけに関する解釈が決まる。

以上のように、時間指示現象を発展させるためには、時間語彙や語用論的要素に関する分析、あるいはアスペクトやモダリティなどの他の範疇との関連性に対する考察はさらに重要となる。本稿では、時間指示現象の一例として時間的遠近 (temporal remoteness) の表示について考える。時間的遠近についてはつづく 2.2 節で説明する。

2.2 時間的遠近 (temporal remoteness)

2.2.1 基本概念

時間的遠近とは、ある基準点に対する事態の時間的位置への遠近評価、認識を指す (川畑 2024a: (80)-(81))。時間的遠近に関する言語学的関心は主に文法記述における実際的な要請のなかで生じてきた²。すなわち、時間的遠近を研究することは、文法的な時制形式で実現される時間的遠近を研究することを意味した。

² 時間構造上、時間的遠近と関連するのが時間間隔 (temporal interval) であるが、時間間隔への関心は事態内部の動作様態に関するアスペクト的議論の中で生じてきた。これは時間的遠近に対する関心の発生動機とは異なる。

たとえば、表 1 は南アメリカ大陸のペルー北東部で話される Yagua (Peba-Yaguan) の過去時制をまとめたものである (Payne and Payne 1990)。Yagua では、発話時現在を基準に、過去という時間領域を現在に最も近い Proximate 1 から最も遠い Past 3 まで 5 つに区分し、時間軸における事態の時間的位置に応じて時制形式を使い分けている³。

表 1 Yagua の過去時制 (Payne and Payne 1990: 386-388)

	Tense suffix	Temporal meaning
Proximate 1	<i>-jásiy</i>	A few hours previous to the time of utterance
Proximate 2	<i>-jay</i>	One day previous to the time of utterance
Past 1	<i>-siy</i>	Roughly one week ago to one month ago
Past 2	<i>-tíy</i>	Roughly one to two months ago up to one or two years ago
Past 3	<i>-jada</i>	Distant or legendary past

このような「時間的遠近」という概念ないし現象は、これまでの言語研究において、多くの関心を集める対象ではなかった。時間的遠近の区別を文法的な時制形式で表す言語がアフリカのニジェール・コンゴ語群やパプアニューギニアのトランスニューギニア語群、アメリカ大陸の先住民語などに集中し、地域限定的に観察されるという傾向 (Botne 2012: 536, Dahl and Velupillai 2013) や、形態統語的な標示の義務性／任意性 (Matthewson 2006, Gil 2011 など)、意味的特徴などに関する問題から、あくまでも文法的な時制研究に伴う周辺の現象と見られてきた。分析や理論が精緻化され始めるのは 2000 年代以降である (時制モデルに関する認知的分析は Botne and Kershner 2008, Nurse 2008, Botne 2012 など; 形式意味論的分析は Bohnemeyer 2009, Cable 2013, Klecha and Bochnak 2016, Bochnak and Klecha 2018, Chamorro 2020, Johnson 2022 など)⁴。文法形式における時間的遠近の研究がこの 20 年でようやく本格化した中で、時間的遠近の語彙的表示に関する関心はいまだ乏しい。時間的遠近が通言語的に文法形式よりも語彙形式によって表されやすいことも関心の低さの一因であると考えられる (Klein 2009, Tonhauser 2015 など参照)。

³ 時間区分の数は言語によって差があり、通時的あるいは共時的変化を通じて区分が減少、解消する場合もある (Heine 1973, Kula 2017, Daniels 2020 など)。

⁴ 時間的遠近に対する関心の発生と研究の発展は、無時制言語 (tenseless languages) における時間指示 (reference) の研究が 1990 年代後半から徐々に発展したこととも関連する。

2.2.2 表示方法に関する特徴：朝鮮語の場合

次に、時間的遠近の表示方法に関する特徴を述べる。本稿では朝鮮語の例を取りあげる。朝鮮語は、時間的遠近の表示において意味的、形態統語的なパターンを複数有しており（川畑 2024a）、表示方法の特徴や類型を考える上で参考となる言語の一つである。

朝鮮語では、遠近表示に関わる時間語彙として以下のような形式が挙げられる。

- (2) a. akka 「さっき」、pangkum 「今し方」、cikum 「今」
kumpang 「今し方；すぐ」、itta(ka) 「あとで、後ほど」 など
- b. kas 「(～し) たて」、mak 「ちょうど、(～した) ばかり」
kot 「すぐ、直ちに」、palo 「すぐ、直ちに」 など

(2a) は主に中心の意味として発話時を表す直示語彙が該当する。直示の中心が近さのニュアンスを潜在的に持つことに伴い、直示語彙はこうした遠近に関するニュアンスを表しうる。(2b) は参照時と事態時との時間関係に対して、遠近性（特に(2b)は近接性）を明示する（川畑 2023: 81）。なお、朝鮮語において時間的な遠さを明示する単独形式は、近さを明示する単独形式に比べるとその数は少ない（例：時間名詞 yey 「古」）。これは朝鮮語の時間語彙体系における遠近の非対称性を示す（川畑 2024a: (103)）。また、基準点からの方向を表す「前」や「後」などの表現が時間的な長短を表す語彙を伴うことで、(非) 直示的な時間的距離の遠近を表す (3)。

- (3) a. yengci-nun hancham cen-ey cip-ey ka-ss-e-yo.
ヨンジ-TOP しばらく 前-LOC 家-LOC 行く -PST-IFRM-POL
「ヨンジはしばらく前に家に帰りました。」
- b. chelswu-nun yengci-lul hancham tongan kitaly-ess-ta.
チョルス-TOP ヨンジ-ACC しばらく 間 待つ -PST-DECL
「チョルスはヨンジをしばらくの間待った。」

(川畑 2024a: (103)-(104))

本稿の内容に関連して注目するのが、遠近明示的な語彙形式における意味的特徴である。(2b) で挙げた時間的近さを表す kas 「(～し) たて」や mak 「ちょうど、(～した) ばかり」、kot 「すぐ、直ちに」、palo 「すぐ、直ちに」などは、通時的あるいは共時的に、時間以外の概念領域（空間や動作様態、論理など）と関連しうる。同一の形式が複数の概念領域に及ぶ意味を表す場合、特に時間や空間などが関わる場合、従来は概念メタフ

アー研究などで扱われてきた。しかし、2.1 節や 2.2.1 節で指摘した「時間的遠近」に対する言語学的な関心の低さもあって、(2b) に相当するような遠近明示的な形式に関する研究は多くなかった。そこで、次の 3 節では、時間的近さを表す上記の時間語彙 kot、palo、mak、kas を対象に、それら形式における概念的特徴を考えてみる。

3 時間的遠近に関する朝鮮語形式

3.1 概念メタファー (Conceptual metaphor)

概念メタファーとは、概念領域 A を異なる概念領域 B を通じて理解することであるが (Lakoff and Johnson 1980, 1999)、こうした領域間の関係は写像 (mapping) という考え方を通じて説明されてきた。たとえば、「先」という空間概念は時間概念も表せる (4)。

- (4) a. この道を行った先にある神社
- b. この先の人生 (=1c)
- c. 先の大戦

(4a) の「先」は「この道」を移動した結果として辿り着く空間を指しており、その場所に「神社」が位置することを表す。一方、(4b) では、「この先」は主体が生きるであろう「未来、将来」という時間領域を指している。(4c) では反対に「先」が「過去」を指す。この場合、主体やその移動が空間領域から時間領域へと転写されることで、空間表現が時間表現としても使用可能となる。なお、(4b) と (4c) における時間の方向性の違い(「未来」と「過去」)は、Moving Observer Metaphor、Moving Time Metaphor、Relative Front Back Metaphor などの違いとして、さまざまな言語で研究されている (Moore 2006, 2014; 篠原 2007, 2008 など)。

なお、空間表現や時間表現はほかにも論理関係について表すこともある。たとえば、田窪 (2018) は日本語の空間名詞「ところ」が時間用法や論理用法を持つことを論じている (5)⁵。

- (5) a. 黒板のところに行く。(空間；場所) (田窪 2018: 1)
 - b. いま歯を磨いているところだ。(時間；進行) (田窪 2018: 7)
 - c. 木村が来たところで情勢に変化はない。(論理；譲歩)
- (田窪 2018: 14)

⁵ 時空間領域と論理領域との関係について、匿名の査読者より貴重なご指摘をいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

以上、概念メタファーに関して簡単に紹介した。時間表現に対する概念メタファーは盛んであるものの、時間的遠近を表しうる語彙への概念メタファー的関心は通言語的にそこまで高いとはいえず (Haspelmath 1997, Heine and Kuteva 2002 参照)、研究課題の一つとして残されている。そこで、本節ではこうした概念メタファー的視点に立って、時間的近さを表す *kot*、*palo*、*mak*、*kas* の概念的特徴を考える。

3.2 副詞 *kot* および副詞 *palo*

3.2.1 副詞 *kot*

現代朝鮮語において、副詞 *kot* の意味と用例は以下の通りである。

(6) *kot* 「副詞」

- a. 時を越えることなく、遅滞なく ≡ *cukpyen* (即便)
- b. 時間的に遠くなく ≡ *cukpyen* (即便)
- c. 言い換えると ≡ *cukpyen* (即便)
- d. 他でもなくまさしく

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

(6a) や (6b) は時間的意味に関するもので、時間間隔の短さを表す。この時間間隔として挙げられるのは、たとえば、発話時点と事態時点との直示的な間隔 (7a) や、2つの事態間の非直示的な間隔 (7b) である。(6c) や (6d) は時間的意味ではなく、事物の言い換えや、要素間の論理関係に対する強調などを示す。つまり、項や節の間の情報が (他の要素を介さず) 直接的に論理的に繋がることを表す (7c)。なお、(6) には記載がないが、(7d) のように *kot* が空間的物理的なまっすぐさを表すこともある。

- (7) a. *sensayng-nim-i kot o-si-l ke-y-ey-yo.*
先生-様-NOM すぐ 来る-HON-PROSP.ADN こと-COP-IFRM-POL
「先生が間もなく来られます。」
- b. *enul-un thoykunha-nun taylo kot hyusikha-tolok*
今日-TOP 退勤する-PRES.ADN まま すぐ 休息する-ように
ha-l-key.
する-PROSP.ADN-PRM
「今日は退勤するなり、すぐ休むようにするよ。」

(『高麗大 韓国語大辞典』, 拙訳)

- c. ai-nun kot nala-uy milay-ta.
 子供-TOP まさに 国-GEN 未来-DECL
 「子供はまさに国の未来だ。」
- d. kot ppet-un ciksen tolo
 まっすぐ 伸びる-PST.ADN 直線 道路
 「まっすぐに伸びた直線道路」

このように、副詞 **kot** は現代朝鮮語において、時間や論理などの概念領域に関する意味を複数持つことが分かる。

なお、**kot** は意味的、形態的に、形容詞 **kotta** の語幹 **kot-** と関連する可能性がある⁶。形容詞 **kotta** の意味と用例は次の通りである (8) (9)。

(8) **kotta** 「形容詞」

- a. 曲がったり歪んだりすることなく、まっすぐである
 b. 心や意志が揺れることなく、まっすぐである

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

- (9) a. kot-key ppet-un namu
 まっすぐだ-ADVR 伸びる-PST.ADN 木
 「まっすぐに伸びた木」
- b. kot-un maum
 まっすぐだ-PRES.ADN 心
 「まっすぐな心」

(9a) は木の生え方が空間的、物理的に歪みがなく、まっすぐであることを表している。一方、(9b) で形容詞 **kotta** が表すのは心の「まっすぐさ」、すなわち性格の真面目さや真摯さなどの抽象的な心理的性質である。

ここで、副詞 **kot** や形容詞 **kotta** の意味を見ると、それぞれ時間や空間、論理などの概念領域と関連することが分かる⁷。これらの意味を考える上では、「直線」という概念

⁶ 中期朝鮮語の副詞派生の一つに「語幹型副詞」がある。たとえば、「語幹型副詞」研究や「語幹型副詞」の該当形式を整理したパク＝ヒョンウ (2021) は、その声調の違いなどを理由に、形容詞 **kotta** の語幹 **kot-** と副詞 **kot** を同音異義語の関係にあると見て、副詞 **kot** を「語幹型副詞」から除いた。ただし、次の 3.2.2 節で扱う副詞 **palo** と形容詞 **paluta** の関係との平行性から、形容詞 **kotta** の語幹 **kot-** と副詞 **kot** に一定の意味的関係があると見ることもできる。

⁷ 論理用法は形容詞 **kotta** に見られず、副詞化したであろう **kot** にのみ確認できる。形容詞 **kotta** が **kot** へと副詞化する過程で論理用法が獲得された可能性があるが、これに関する詳細な共時的、通時的調査は今後の課題とする。

が重要となりうる。すなわち、直線的であるということは、対象となる2つの要素が直線的に最短距離で結ばれるということである。形容詞 **kotta** の空間用法は、空間領域上にある2つの地点が直線により最短距離で結ばれるイメージである。副詞 **kot** の時間用法は、そうした **kotta** の空間的な直線のイメージが時間領域に転写され、時間軸上で2つの時点を直線的に結ぶ様子をもとに、時点を結ぶ経路ないし距離が最短であることが時間的な近さへと転じうる。そして、論理用法は、上記の空間用法や時間用法に見られる「直線性」や「認知距離の短さ」が論理領域に転写されたものと考えられる(図1)。

空間的直線性 > 時間的近接性 > 論理的直接性

図1 副詞 **kot** / 形容詞 **kotta** における概念間の写像関係

3.2.2 副詞 **palo**

つぎに、副詞 **kot** と類義関係にある副詞 **palo** を取りあげる。現代朝鮮語において、副詞 **palo** の意味と用例は以下の通りである。

(10) **palo** 「副詞」

- a. 歪んだり曲がったりしたところがなく、まっすぐ
- b. 偽りや飾りがなく、ありのままで
- c. 事理や原理、原則などに反しないように
- d. 道理、作法、規定、規格などに反しないように
- e. 時間的な間隔を置かず、すぐ
- f. 異なるものや異なる所にあるものではないという意味で、特定の対象を取り上げて指す言葉
- g. 他でもなく、まさしく

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

- (11) a. **nemu colly-ese pap-ul mek-ko palo**
 とても 眠い-INF.EMPH 飯-ACC 食べる-and すぐ
camtul-ess-ta.
 寝付く-PST-DECL
 「とても眠くてご飯を食べてすぐ寝た。」
- b. **sen-ul palo ku-ess-ta.**
 線-ACC まっすぐ 引く-PST-DECL
 「線をまっすぐ引いた。」

- c. hanpok-ul palo ip-nun pangpep.
 韓服-ACC 正しく 着る-PRES.ADN 方法
 「韓服を正しく着る方法」
- d. ai-nun palo nala-uy milay-ta.
 子供-TOP まさに 国-GEN 未来-DECL
 「子供はまさに国の未来だ。」

(11a) は時間的近さ（時間間隔の短さ）に関する例である。それ以外に、空間的物理的なまっすぐさ (11b)、心理的な態度や姿勢、考え方などの全うさ、正しさ (11c)、論理的な直接性 (11d) などに関する例も挙げられる。(11d) は用例 (7c) の kot を palo に交替したものである。

以上より、palo はさまざまな意味を表すことが分かる。なお、この palo は意味的、形態的に形容詞 paluta の語幹 palu-と関連すると考えられる⁸。形容詞 paluta の意味と用例は次の通りである (12) (13)。

(12) paluta 「形容詞」

- a. 一見、歪んだり曲がったりしたところがない ≡ ceng-hata (正-)
 b. 言葉や言動などが社会的な規範や事理に逸れることなく適する
 c. 事実と食い違うことがない
 d. 日陰になることなく、日差しがよく入る

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

- (13) a. sen-ul palu-key ku-ess-ta.
 線-ACC まっすぐだ-ADVR 引く-PST-DECL
 「線をまっすぐに引いた。」
- b. yengci-nun hansang yeyuy-ka paluta.
 ヨンジ-TOP いつも 礼儀-NOM 正しい.DECL
 「ヨンジはいつも礼儀が正しい。」
- c. keci eps-i palu-key malhay-e-la.
 偽り 無い-ADVR 正しい-ADVR 言う-IFRM-IMP
 「偽り無く真に話せ。」

⁸ パク＝ヒョンウ (2021) は、3.2.1 節の副詞 kot を「語幹型副詞」から除いたのに対して、副詞 palo は形容詞 paluta の語幹に由来する「語幹型副詞」に含めている。

副詞 **palo** や形容詞 **paluta** の意味を見ると、空間的な直線性や、時間的近接的、心理的な正しさ、論理的な直接性などに関連することが分かる⁹。形容詞 **paluta** や副詞 **palo** の空間用法は、空間領域上にある 2 つの地点が直線により最短距離で結ばれることを表す。副詞 **palo** の時間用法は、形容詞 **paluta** や副詞 **palo** の空間用法における空間的直線性が時間領域に転写され、時間軸上で 2 つの時点を直線的に最短距離で結ぶ様子が転じて時間的近接性を表すようになったと考えられる。そして、論理用法は、上記の空間用法や時間用法に見られる「直線性」や「認知距離の短さ」が論理領域に転写されたものと考えられる。言い換えると、そうした抽象的イメージは、適用される概念領域の違いに伴って、空間的意味や心理的意味、論理的意味などへ分化しうる¹⁰。

3.2.3 関連形式

副詞 **kot** と副詞 **palo** は両者が形態的に合わさることで、副詞 **kot-palo** という複合形式をなす。副詞 **kot-palo** の意味と用例は以下の通りである (14) (15)。

(14) **kot-palo** 「副詞」

- a. すぐ、直ちに
- b. 曲がったり傾いたりせずまっすぐな方向に
- c. 違う場所を経たり、立ち寄ったりせず
- d. 遠くないすぐ近くに

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

- (15) a. **nemu colly-ese pap-ul mek-ko**
 とても 眠い-INF.EMPH 飯-ACC 食べる-and
kot-palo camtul-ess-ta.
 すぐ 寝付く-PST-DECL
 「とても眠くてご飯を食べてすぐ寝た。」
- b. **i kil-ul kot-palo ka-myen toy-nta.**
 この 道-ACC まっすぐ 行く-COND なる-DECL
 「この道をまっすぐ行けば良い。」

加えて、**mak** と **palo** が合わさった **mak-palo** という副詞も見られる (16)。

⁹ 時間用法は形容詞 **paluta** に見られず、副詞化した **palo** にのみ確認できる。一つの考え方として、形容詞 **paluta** が **palo** へと副詞化する過程で時間的意味を表す用法が獲得された可能性があるが、これに関する詳細な共時的、通時的調査は今後の課題とする。

¹⁰ 類例としては、英語の **straightforward** や日本語の「すぐ」「まっすぐ」などが挙げられるであろう。これらの例をご教示くださった匿名の査読者に感謝申し上げます。

(16) mak-palo 「副詞」

時間的な間隔なく、すぐに

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

ほかに、kotcang という副詞もある。意味的、形態的に kot と関連する可能性がある。

(17) kotcang 「副詞」

a. 横道に逸れることなくまっすぐ

b. 間もなく、すぐ

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

(18) pi-ka kuchi-camaca kotcang chang-ul yel-ess-ta.

雨-NOM 止む-as.soon.as すぐ 窓-ACC 開ける-PST-DECL

「雨が止むや否や、すぐに窓を開けた。」

また、現代朝鮮語における使用頻度は高くないが、朝鮮語の辞書には kotay という形式が見られる (19) (20)。

(19) kotay 「副詞」

a. ちょうど今

b. まさにすぐ

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

(20) kotay ha-n iyaki-lul tto ha-la-n

ちょうど今 する-PST.ADN 話-ACC また する-IMP-QUOT

mal-i-nya.

こと-COP-Q

「今した話をまたやれということか。」

(『標準国語大辞典』)

ミン=ヒョンシク (1987: 226) やコ=ヨンゲン (2010: 188) によれば、kotay は副詞 kot に処格助詞-ay が接続した形式だとされる¹¹。意味に関して、(19) に示す kotay の意味はいずれも時間に関するものであるが、これは専ら大韓民国における用法である。国立国語院の『ウリマルセム』や民族語大辞典南北共同編纂事業会が提供する語彙検索サ

¹¹ 現代朝鮮語の処格助詞は-ey だが、中期朝鮮語では名詞の母音に応じて-ay/ey が交替した。

イト『一目で分かる南北言語』によると、朝鮮民主主義人民共和国では、*kotay* は時間的意味のほかに、ある基準地点からの近さを表す空間の意味も持ち、地域差が見られる。

3.3 副詞 *mak*

つづいて、副詞 *mak* について考える。現代朝鮮語において、時間副詞 *mak* の意味と用例は以下のように記述される (21) (22)。

(21) *mak* 「副詞」

- a. ちょうど今
- b. ちょうどその時

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

(22) a. *unpi-nun icey mak ilpone-lul paywu-ki*
 ウンビ-TOP 今 ちょうど 日本語-ACC 学ぶ-NMLZ
sicakhay-ss-ta.

始める-PST-DECL

「ウンビはちょうど日本語を学び始めたばかりだ。」

b. *kuttay chelswu-nun tayhakkyo-ey mak iphakha-n*
 その時 チョルス-TOP 大学校-LOC ちょうど 入学する-PST.ADN
sinipsayng-i-ess-ta.

新入生-COP-PST-DECL

「その時、チョルスは大学に入学したばかりの新入生であった。」

(22a) では、ウンビの日本語学習開始時点と参照時点（この場合は、発話時点）が近接するという直示的（絶対時制的）な関係を表している（図 2）。一方、(22b) では、発話時点以外の参照時点（この場合は、「その時」）に対して、チョルスの大学入学時点が近接しているという照応的（相対時制的）な関係を表している（図 3）。

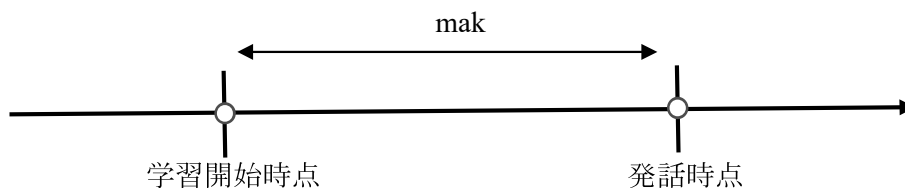
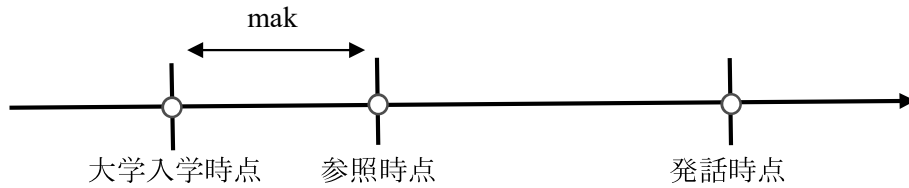


図 2 (22a) における時間副詞 *mak* の直示的（絶対時制的）な解釈

図3 (22b)における時間副詞 **mak** の照応的（相対時制的）な解釈

なお、この **mak** という形式は、時間副詞以外にも、様態副詞 **mak**（本来形は **makwu** とされる）、接頭辞として一部の名詞に付く **mak-**、談話標識 **mak**、また程度副詞 **mak** などとして用いられる。談話標識 **mak** は、発話における時間稼ぎや発言権の維持などの「発話維持」、注意の喚起などの「焦点化」、強化や否定的態度の表示、強調などの「主観的態度の表示」として機能する（アン＝ジョニア 2008, 2015: 322-327）。また、朝鮮半島の南西に位置する大韓民国済州特別自治道にて話される済州方言などでは **mak** に「とても、非常に」を表す程度副詞としての用法があり、形容詞を修飾する（イム＝ギュホン 2005、シン＝ウボン 2016）。たとえば、(23) と (24) はそれぞれ様態副詞 **mak** の本来形である **makwu** の意味説明と用例を示したものである。

(23) **makwu** 「副詞」

- a. ひどく激しく. またはとても甚だしく
- b. いい加減に、むやみに

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

- (24) a. **nemu sulph-ese makwu wul-ess-ta.**
 とても 悲しい-INF.EMPH 激しく 泣く -PST-DECL
 「とても悲しくて、激しく泣いた。」
- b. **chelswu-ka mak mek-ess-ta.**
 チョルス-NOM 激しく 食べる -PST-DECL
 「チョルスが激しく（乱雑に）食べた。」

様態副詞 **mak** を用いることで、(24a) では泣き方が激しく、甚だしいことを、(24b) では食べ方が粗雑であることを表している。

以上より、**mak** という形式はさまざまな意味を担うが、それら意味間の関係において時間副詞用法がどのように位置づけられるかは共時的に明らかでない。そこで、川畑 (2024b) は「時間間隔 (temporal interval)」という時間構造に着目して、時間副詞用法の位置づけに関する説明を試みた (図 4)。縦軸を「事態の展開度合い」、横軸を「事態の経過時間」として、その平面上に「**mak** が修飾する事態」と「ある事態 A」を示すと、

図4のようになると考えられる。(24b)のように、「食べる」で考えてみると、「ある事態 A」とは何の変哲もない、一般にイメージされるような普通の食事の様子を指している。「事態の展開度合い」をはかる指標はさまざま考えられるが、仮に「お皿にのった料理を完食する」を事態の終了と捉えるならば、「ある事態 A」では一定の時間で完食がなされることになる。早食いをすれば、完食までの時間は短くなる。食べるのが遅い人であれば、完食までの所要時間も長くなる。この「ある事態 A」に対して、「mak が修飾する事態」は「食べ方の激しさや強さ、勢いの良さ」が表される。その激しさや強さ、勢いの良さは両者の「角度」の差として現れる。その結果、同等の展開度合い（「完食」）に達するまでの経過時間は mak の事態のほうが短くなる。

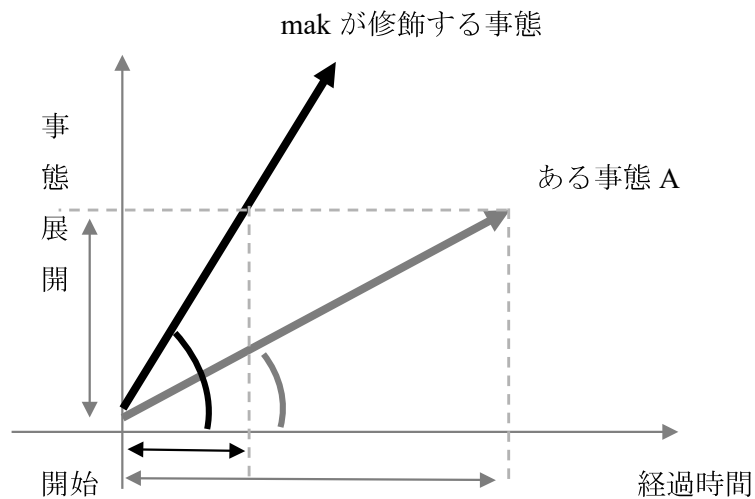


図4 makによって表される事態展開のイメージ (川畑 2024b, 一部修正)

(22) の時間副詞 mak における時間的近さのニュアンスは、そうした mak が修飾する様態的特徴に伴う時間間隔の短さに由来するのではないかと考えられる。つまり、時間間隔に関する意味が抽象化し、事態内関係から事態間関係の表示へも適用範囲が拡がり、時間用法として確立したと考えられる。

3.4 副詞 kas

現代朝鮮語において、副詞 kas の意味と用例は以下の通りである。

(25) kas 「副詞」

ちょうど今

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

- (26) khaphey an-un kas pokk-a nay-n khephi-uy
 カフェ 中-TOP したて 煎る-INF 出す-PST.ADN コーヒー-GEN
 hyang-ulo katukhay-ss-ta.
 香り-INST 一杯だ-PST-DECL

「カフェの中は煎りたてのコーヒーの香りで一杯だった。」

(『高麗大 韓国語大辞典』, 拙訳)

(26) のように、時間副詞 **kas** は基準時点に対して時間的に近いことを表す。この **kas** という音形式は、現代朝鮮語において、時間副詞 **kas** 以外にも名詞の **kas**「笠」や **kas**「芥子菜」、英語の **god** (神) をハングル表記にした **kas** などとして用いられるが、それら名詞と時間副詞 **kas** は意味的、形態的に同源の関係にはない¹²。つまり、**kas** という音形で実現され、かつ「時間的近さ」と関連しうる意味を持つ語は現代朝鮮語に見られない。では、時間副詞 **kas** の同源形式は存在しうるのか。この問いを考えるため、『ウリマルセム』で時間副詞 **kas** の通時的特徴を確認したところ、次の通りであった。

- (27) 現代国語‘**kas**’の古語である‘**kos**’は 15 世紀文献から現れる。18 世紀に第 1 音節の‘**o**’が‘**a**’に変化したが、‘**kos**’もこの変化を経験し‘**kas**’となり現在に至った。
 (『ウリマルセム』, 拙訳)

現代朝鮮語の **kas** は中期朝鮮語において **kos** あるいは **koz** という形式であった (キム＝ムリム 2012: 15)¹³。なお、この **kos**／**koz** は上記の時間副詞以外にも、空間名詞の用法も有していたとされる。すなわち、「境界、終わり、周辺、端」などを表す空間名詞と「たった今、今し方」を表す時間副詞として使われていたということである (イ＝ドンソク 2003: 2-3)。(28a) と (28b) はそれぞれ 15 世紀半ば (1447 年) の古ハングル文献『釈譜詳節』に在証される空間名詞と時間副詞の用例である。

- (28) a. 楞伽山-i 南天竺 palol-s koz-ay is-no-ni
 楞伽山-NOM 南天竺 海-GEN 端-LOC 在る-IND-SEQ
 「楞伽山が南天竺の海沿いにあり」

(1447 年『釈譜詳節』6 卷: 43b)

¹² 現代朝鮮語の時間副詞 **kas** は中期朝鮮語において **kos** であった一方、「笠」や「芥子菜」などの名詞 **kas** は中期朝鮮語でも **kas** であり、母音 **a** と **o** の違いが見られた。しかし、(27) のように、一定の条件下で **o** > **a** の音変化が生じたことで、**kos** と **kas** は **kas** へと合流した。

¹³ 中期朝鮮語の **koz** における半歯音の **z** は **s** の弱化による (キム＝ムリム 2012: 15)。

- b. kutuy 精舎 cizwu-lye theh-ul kos 始作 ho-ya
君 精舎 建てて-INTV 土地-ACC したて 始める-INF
toy-enul
なる-CONC

「君が精舎を建てんと土地を（測り）始めたばかりだが」

(1447 年『釈譜詳節』6 卷: 35a-b)

以上、kos/koz という形式は中期朝鮮語の時代には 2 つの意味で使われていたが、現代へ進むにつれて kos/koz の空間名詞用法には形態音韻的な変化が生じた (29)。

- (29) 中世国語‘kos’は近代国語において音節末子音が脱落し‘ko’となり、母音‘o’が‘a’に変化し、‘ka’となった。(キム＝ムリム 2012: 15, 拙訳)

つまり、中期朝鮮語の空間名詞 kos/koz は、現代朝鮮語において ka で現れている。空間名詞 ka の意味と用法は次の通りである。なお、現代朝鮮語では、空間的な概念を表す名詞 ka が共時的に時間概念を表すことはない (ミン＝ヒョンシク 1990: 59)。

- (30) ka 「名詞」

- a. 境界に近い外側の部分
- b. ある中心となる所から近い部分
- c. 器などの口（入り口、差し口）の周辺
- d. ((一部名詞のあとに付き)) ‘周辺’ の意味を表す言葉

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

- (31) a. kang-ka

川-周辺

「川辺」

- b. ip-ka-ey miso-ka pency-e-yo.
口-周辺-LOC 笑み-NOM 広がる-IFRM-POL

「口元に笑みが広がります。」

- c. chamkilum-lul ttalu-l ttay ka-ey hulli-ci
ごま油-ACC 注ぐ-PROSP.ADN 時 縁-LOC 溢す-CONN
anh-tolok cosimhay-la.
NEG-ように 注意する.IFRM-IMP

「ごま油を注ぐ時は縁に溢さないように注意しなさい。」

(『標準国語大辞典』, 拙訳)

名詞に **ka** が付く例に関して、『標準国語大辞典』で調査した結果の一部を以下の表 2 に示す。特徴として、「川」や「海」、「泉」、「池」、「湖」など、水に関わる自然の地形と共起しやすいことが分かる。この **ka** の用法は日本語の「～辺」や「～際」、「～沿い」と意味的に似ている。

表 2 -ka「～の周辺」の語形 (一部)

kang-ka (江-ka)	川辺、川岸
kaywul-ka	小川のほとり、水辺
kaychen-ka (kay 川-ka)	川辺、小川のほとり
kay-s-ka	海水が出入りするところの水辺、水の流れるところの端、縁
kwuy-s-ka	耳のまわり、耳元
kil-ka	道端、沿道
nalwu-s-ka	渡し場 (船乗り場) の近所やその近い水辺、渡し場の付近
nanlo-s-ka (暖爐-s-ka)	暖炉を中心とした近い周囲、暖炉の付近
nay-s-ka	川辺、川岸
nwun-ka	目のまわり、目元
nuph-ka	沼の周囲、沼辺
tali-s-ka	橋の辺り、周囲、付近
mos-ka	池のまわり、池辺
mwutem-ka	墓場、お墓の周囲
mwun-ka (門-ka)	門のとなりや周辺
mwul-ka	水辺
pata-s-ka	海辺
saymmul-ka	泉・湧き水の出るところの周り、縁
swuto-s-ka (水道-ka)	水道水の出るところやその近く
swuphwul-ka	藪・茂みの周囲
sinay-s-ka	小川のほとり
yenmos-ka	池のまわり、池辺
wumul-ka	井戸端

ip-ka	口のまわり、口元
cangtok-ka (醬 tok-ka)	甕置き場の周囲
chang-ka (窓-ka)	窓辺、窓際
khunkil-ka	街路沿い、大通り沿い
hanul-ka	空の果て
haypyen-ka (海邊-ka)	海水と大地が互いに触れるところやその近く。海岸沿い
hayan-ka (海岸-ka)	海水と大地が互いに触れるところやその近く。海岸沿い
hoswu-s-ka (湖水-ka)	湖のほとり、湖辺
hwalo-s-ka (火爐-ka)	火爐のとなり、周囲、付近

以上、時間副詞 **kas** の共時的通時的な特徴や、同源と思われる空間名詞 **ka** について説明したが、時間副詞 **kas** (< **kos**) と空間名詞 **ka** (< **kos**/**koz**) の間には意味的な関連性があると考えられる。イ＝ドンソク (2003) は中期朝鮮語の時間副詞 **kos** と空間名詞 **kos**/**koz** の関連について (32) のように述べている。

- (32) 『始まり』と『終わり』を結び、時間の連続性を生み出す時、副詞‘**kos**’は『始まり』の『端』に該当し、副詞‘**kyelkwuk** [結局]’は『終わり』の『端』に該当する。方向性が介入した『始まり』と『終わり』という概念の代わりに、方向性がより介入していない『端』という概念を通じて観察すれば副詞‘**kos**’と名詞‘**kos**’が『端』という点において相通ずるという点が容易に発見される。

(イ＝ドンソク 2003: 2, 拙訳; [--] は補足)

「端」という概念への着目は興味深いだが、説明としての具体性や分かりやすさにはやや欠ける。本稿では、時間用法と空間用法の意味的関係を以下のように捉える: 認知空間上に一定の領域が存在すると想定し、その領域の周縁部を指すことが中期朝鮮語 **kos**/**koz**、そして現代朝鮮語の時間副詞 **kas** と空間名詞 **ka** の本質的な機能である。空間領域の場合、「一定の領域」とは海や池、川、山などの自然の地形、口や窓などを始めとした対象などを意味し、「領域の周縁部」は対象の境界や輪郭の付近のことである。つまり、空間名詞 **ka** は一定の領域における空間的な境界近傍を指す。時間副詞 **kas** (< 中期朝鮮語 **kos**/**koz**) は、そうした空間領域における空間的な境界近傍性が時間領域に転写された用法であると考えられる。時間副詞 **kas** における「一定の領域」は対象となる事態、「領域の周縁部」は事態の境界である開始あるいは終了時点の近傍を指す。まとめると、空間名詞 **ka** は「空間領域の境界部分に対する空間的近接性」を、時間副詞

kas は「時間領域における事態の境界（開始や終了時点）に対する時間的近接性」を表していると言える（図 5）。

空間的境界近傍性 > 時間的近接性

図 5 空間名詞 ka/時間副詞 kas における概念間の写像関係

3.5 その他の形式

時間的遠近を表しうる朝鮮語の時間語彙として、固有語のほかに漢字語の形式も存在する。tangcang（當場）はその一例である。

(33) tangcang（當場）「名詞」

- a. 出来事が起きたまさにその場所
- b. 出来事が起きたまさに直後の早い時間
- c. 目前に迫った現在のこの時間

（『標準国語大辞典』，拙訳）

(34) cikum tangcang kongpu-lul hay-la.

今 この場 勉強-ACC する.IFRM-IMP

「今この場で（すぐ）勉強をしろ。」

漢字表記からも分かるように、空間的な側面を含んでいる。すなわち、対象となる事態（「勉強」）が発話の生起地点と同一ないし近接の地点で生起することを表している。事態間の時間的近さはそうした空間的近さと相関している。

3.6 概念的特徴に関するまとめ

3 節で記述した各形式の意味や特徴をまとめると以下の通りである。

- (35) a. 時間副詞 kot「すぐ、直ちに」は、形容詞 kotta「まっすぐだ、正しい」と意味的、形態的に関連しうる。用法間には空間的直線性>時間的近接性>論理的直接性の概念領域間の写像関係が想定される。
- b. 時間副詞 palo「すぐ、直ちに」は、形容詞 paluta「まっすぐだ、正しい」と意味的、形態的に関連しうる。用法間には空間的直線性>時間的近接性>論理的直接性の概念領域間の写像関係が想定される。

- c. 時間副詞 **mak** 「ちょうど、(～した) ばかり」は、様態副詞 **mak** 「激しく、甚だしく」と意味的、形態的に関連しうる (川畑 2024b)。
- d. 時間副詞 **kas** 「(～した) ばかり、(～し) たて」は、空間名詞 **ka** 「境界の近傍、周縁部、～の付近」(< 中期朝鮮語 名詞 **kos**/**koz**) と意味的、形態的に関連しうる (イ=ドンソク 2003 参照)。
- e. 時間副詞 **kot** や **palo** の複合形式や、空間性と関連する漢字語の時間語彙も存在する。

時間副詞 **kot** と **palo** は、同一の音形式が時間的意味に対して空間的意味や論理の意味などを共時的に併存させており、いずれも **kotta** 「まっすぐだ、正しい」や **paluta** 「まっすぐだ、正しい」などの形容詞表現と関連しうる。空間的意味や時間的意味、論理の意味の間には空間的直線性>時間的近接性>論理的直接性という概念領域間の写像関係が想定される。

時間副詞 **mak** の場合、同一の音形式が様態副詞用法や程度副詞用法などを共時的に持ってはいるものの、平行例などの乏しさから意味間の関わりを確認することが容易ではなく、時間副詞 **mak** の位置づけも明らかでなかった。川畑 (2024b) はそうした問題に取り組むため、「事態展開に伴う時間性」、すなわち「時間間隔」に着目し、説明を行っている。時間副詞 **mak** は、**mak** の様態的特徴に伴う時間間隔の短さが抽象化し、時間用法として確立したものであると考えられる (川畑 2024b)。

そして、時間副詞 **kas** の場合、複数存在する同音形式の中に同源関係にあるものは見られない。通時的に調べたところ、中期朝鮮語の空間名詞 **kos**/**koz**、現代朝鮮語の空間名詞 **ka** が時間副詞 **kas** と意味的、形態的に関連しうる。空間領域においてある対象の境界近傍を指すという性質が時間領域に転写され、時間的近接性を表すものが時間副詞 **kas** であると考えられる。

4 おわりに

本稿では、時間的近さを明示する朝鮮語の時間語彙 **kot**、**palo**、**mak**、**kas** を対象に、それら時間語彙が他の概念領域とどのように関連しうるのかを概念メタファー的視点から考えてみた。その結果、時間副詞 **kot** と **palo** の場合、空間領域における空間的直線性が時間領域における時間的近接性へ、さらに論理領域における論理的直接性へと転写されたと考えられる。時間副詞 **mak** の場合は、様態副詞 **mak(wu)** が持つ様態的意味に関する特徴 (事態展開における時間間隔の短さ) が時間用法へと拡大したと考えられる。時間副詞 **kas** の場合、空間領域における空間的境界近傍性の性質が時間領域に転写され、

時間的近接性を表すと考えられる。このように、時間的近さを明示する朝鮮語の時間語彙には空間や論理、動作様態などの概念領域と関連することが分かる。

なお、本稿には課題がある。通時的分析の不足はその一つである。時間副詞 *kot* や *palo*、*mak*、*kas* の分析では、当該の形式に関連する諸概念の存在は言及した。しかし、それら概念間の関係や、時間的意味の具体的な通時的発生過程については、紙幅の都合もあり、言及できなかった、あるいは可能性の指摘にとどまった。通時的調査を通じた詳細な分析は今後の課題とする。また、空間領域や論理領域などと関連することなく時間的意味に特化した時間語彙（副詞、形容詞など）の有無は、本稿の内容と関連して、今後扱うべき課題である。

略号一覧

ACC: accusative; ADN: adnominal; ADVR: adverbializer; CONC: concessive; COND: conditional; CONN: connective; COP: copula; DECL: declarative; EMPH: emphatic; GEN: genitive; HON: honorific; IFRM: informal; IMP: imperative; INF: infinitive; INST: instrumental; INTV: intensive; LOC: locative; NEG: negation; NMLZ: nominalizer; NOM: nominative; POL: polite; PRES: present; PROSP: prospective; PRM: promissive; PST: past; Q: question; QUOT: quotation; SEQ: sequential; TOP: topic

参考文献

- アン＝ジョンア[안정아] (2008) 「담화표지 ‘막’의 의미와 기능」 『한국어학』 40: 251–279. [談話標識 ‘mak’の意味と機能]
- アン＝ジョンア[안정아] (2015) 「부사 기원 담화 표지의 담화 기능 비교 연구 -"그냥", "막", "좀"을 중심으로-」 『언어와 정보사회』 26: 313–342. [副詞起源談話標識の談話機能比較研究 –“kunyang”, “mak”, “com”を中心に]
- Baker, Mark and Lisa Travis (1997) Mood as verbal definiteness in a “tenseless” language. *Natural Language Semantics* 5: 213–269.
- Bittner, Maria (2005) Future discourse in a tenseless language. *Journal of Semantics* 22: 339–387.
- Bochnak, M. Ryan and Peter Klecha (2018) Temporal remoteness and vagueness in past time reference in Luganda. In Jason Kandybowicz, Travis Major, Harold Torrence and Philip T. Duncan (eds.) *African linguistics on the prairie: Selected papers from 45th Annual*

- Conference on African Linguistics*, 377–391. Berlin: Language Science Press.
- Bohnenmeyer, Jürgen (1998) Time relations in discourse: Evidence from a comparative approach to Yukatek Maya. Doctoral dissertation, Tilburg University.
- Bohnenmeyer, Jürgen (2002) *The grammar of time reference in Yukatek Maya*. Munich: Lincom Europa.
- Bohnenmeyer, Jürgen (2009) Temporal anaphora in a tenseless language. In Wolfgang Klein and Ping Li (eds.) *The Expression of Time*, 83–128. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Botne, Robert (2012) Remoteness distinctions. In Robert I. Binnick (ed.) *The Oxford handbook of tense and aspect*, 536–562. Oxford: Oxford University Press.
- Botne, Robert and Tiffany L. Kershner (2008) Tense and cognitive space: On the organization of tense/aspect systems in Bantu languages and beyond. *Cognitive linguistics* 19(2): 145–218.
- Cable, Seth (2013) Beyond the past, present, and future: Towards the semantics of ‘graded tense’ in Gĩkũyũ. *Natural language semantics* 21(3): 219–276.
- Chamorro, Pilar (2020) Past temporal reference and remoteness distinctions in Guajajára. *International Journal of American Linguistics* 86(3): 331–365.
- Comrie, Bernard (1985) *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cover, Rebecca T. (2015) Semantic fieldwork on TAM. In Michael Ryan Bochnak and Lisa Matthewson (eds.) *Methodologies in Semantic Fieldwork*, 233–268. Oxford: Oxford University Press.
- Cover, Rebecca T. and Judith Tonhauser (2015) Theories of meaning in the field: Temporal and aspectual reference. In Michael Ryan Bochnak and Lisa Matthewson (eds.) *Methodologies in Semantic Fieldwork*, 306–349. Oxford: Oxford University Press.
- Dahl, Östen (1985) *Tense and aspect systems*. Oxford: Basil Blackwell.
- Dahl, Östen and Viveka Velupillai (2013) The past tense. In Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath (eds.) *WALS Online* (v2020.3) [Data set]. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.7385533> (Available online at <https://wals.info/feature/66A#2/26.7/149.1>, Accessed on 2024-09-27.)
- Daniels, Don (2020) The history of tense and aspect in the Sogeram family. *Journal of Historical Linguistics* 10(2): 167–208.
- Dryer, Matthew S. and Martin Haspelmath (eds.) (2013) *WALS Online* (v2020.3) [Data set]. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.7385533> (Available online at <https://wals.info>, Accessed on 2024-09-27.)
- Gil, David (2011) Obligatory vs. Optional Tense-Aspect-Mood Marking in Austronesian

- Languages. *Proceedings of the International Workshop on TAM and Evidentiality in Indonesian Languages*, 17–18. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 17 February 2011.
- Haspelmath, Martin (1997) *From space to time: Temporal adverbials in the world's languages*. München/Newcastle: LINCOM Europe.
- Heine, Bernd (1973) *Pidgin-Sprachen im Bantu-Bereich (Kölner Beiträge zur Afrikanistik, 3)*. Berlin: Dietrich Reimer.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva (2002) *World lexicon of grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Johnson, Kimberly (2022) Time and evidence in the graded tense system of Mvskoke (Creek). *Natural Language Semantics* 30: 155–183.
- 川畑祐貴 (2023) 「時間的遠近の強調的表示について：朝鮮語の時間語彙を中心に」『京都大学言語学研究』42: 77–99.
- 川畑祐貴 (2024a) 「朝鮮語における時間的遠近の表示について：時点位置と時間間隔の関係性」『朝鮮学報』264: (75)–(117).
- 川畑祐貴 (2024b) 「時間間隔における時間性とアスペクト性の交わり：韓国語の時間表現を中心に」日本言語学会第168回大会ポスター発表. 国際基督教大学, 2024年6月29日.
- キム＝ムリム[김무림](2012)『한국어 어원사전』서울: 지식과교양. [韓国語語源辞典]
- Klecha, Peter and M. Ryan Bochnak (2016) Temporal remoteness and relativity. *Proceedings of North-East Linguistic Society (NELS)* 46(2): 213–226.
- Klein, Wolfgang (1994) *Time in language*. London: Routledge.
- Klein, Wolfgang (2009) How time is encoded. In Wolfgang Klein and Ping Li (eds.) *The Expression of Time*, 39–81. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- コ＝ヨングン[고영근] (2010)『표준 중세국어문법론 제3판』서울: 집문당. [標準中世国語文法論 第3版]
- Kula, Nancy C. (2017) Reduction in remoteness distinctions and reconfiguration in the Bemba past tense. *Transactions of the philological society* 115(1): 27–57.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenge to Western thought*. New York: Basic Books.
- イ＝ドンソク[이동석] (2003) 「중세 국어 ‘곳/곶’ 파생형에 대한 형태·의미

- 적 연구」『동양학』 33: 1-16. [中世国語‘ㄱ/ㄴ’派生形に関する形態・意味的研究]
- イム＝ギュホン [임규홍] (2005) 「국어 방언 정도부사 연구」『언어과학연구』 34: 237-272. [国語方言程度副詞研究]
- Lin, Jo-Wang (2006) Time in language without tense: The case of Chinese. *Journal of Semantics* 23(1): 1-53.
- Matthewson, Lisa (2006) Temporal semantics in a superficially tenseless language. *Linguistics and Philosophy* 29(6): 673-713.
- ミン＝ヒョンシク [민현식] (1987) 「한국어 부사에 대한 연구 -중세국어 부사의 유의어를 중심으로-」『국어교육』 61: 201-248. [韓國語の副詞に関する研究 -中世国語副詞の類義語を中心に-]
- ミン＝ヒョン시크 [민현식] (1990) 「時間語와 空間語의 相關性(1): 품사 하위분류의 새로운 가능성과 관련하여」『國語學』 20: 47-71. [時間語と空間語の相關性(1): 品詞下位分類の新たな可能性と関連して]
- Moore, Kevin E. (2006) Space-to-Time Mappings and Temporal Concepts. *Cognitive Linguistics* 17: 199-244.
- Moore, Kevin E. (2014) *The Spatial Language of Time: Metaphor, metonymy, and frames of reference*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Mucha, Anne (2013) Temporal interpretation in Hausa. *Linguistics and Philosophy* 36(5): 371-415.
- Nurse, Derek (2008) *Tense and aspect in Bantu*. New York: Oxford University Press.
- パク＝ヒョンウ [박형우] (2021) 「중세 국어의 어간형 부사에 대한 연구」『청람어문교육』 81: 165-196. [中世国語の語幹型副詞についての研究]
- Payne, Doris L. and Thomas Payne (1990) Yagua. In Desmond C. Derbyshire and Geoffrey K. Pullum (eds.) *Handbook of Amazonian Languages* 2, 249-474. Berlin: Mouton de Gruyter.
- シン＝ウボン [신우봉] (2016) 「제주방언 정도부사 연구-목록과 분류를 중심으로-」『영주어문』 34: 5-36. [濟州方言程度副詞研究 -目錄と分類を中心に-]
- 篠原和子 (2007) 「時間メタファーにおける図と地の問題」楠見孝 (編)『メタファー研究の最前線』 201-216. 東京：ひつじ書房.
- 篠原和子 (2008) 「時間メタファーにおける「さき」の用法と直示的時間解釈」篠原和子・片岡邦好 (編)『ことば・空間・身体』 179-211. 東京：ひつじ書房.
- 田窪行則 (2018) 「トコロの多義性を通じて見た言語、認知、論理」『言語研究』 154: 1-27.

Tonhauser, Judith (2011) Temporal reference in Paraguayan Guaraní, a tenseless language. *Linguistics and Philosophy* 34(3): 257–303.

Tonhauser, Judith (2015) Cross-linguistic temporal reference. *The annual review of linguistics* 1:129–154.

高麗大学校民族文化研究院『高麗大 韓国語大辞典 (고려대 한국어대사전)』

国立国語院『標準国語大辞典 (표준국어대사전)』 (<https://stdict.korean.go.kr/>) (最終アクセス 2024/10/9)

民族語大辞典南北共同編纂事業会『一目で分かる南北言語 (한눈에 들어오는 남북 언어)』 (<http://dic.gyeongmal.or.kr/>) (最終アクセス 2024/10/9)

Conceptual features of temporal remoteness words in Korean

Abstract

This study examines whether and how Korean temporal remoteness words would be related to other conceptual domains such as space, event and logic from a viewpoint of Conceptual Metaphor Theory. We investigate Korean temporal adverbs which denotes temporal closeness, such as *kot*, *palo*, *mak* and *kas*, and find that meanings of *kot* and *palo* are likely to be semantically and morphologically related to adjectives *kotta* and *paluta* respectively and derive from the conceptual mapping from space to time, and to logic. The temporal closeness of temporal adverb *mak* occurs from shortness of temporal interval caused by the manner adverb *mak(wu)* (Kawabata 2024b) and the temporal adverb *kas* derives from the conceptual mapping from space to time: spatial boundary-closeness of the spatial noun *ka* (< Middle Korean *kos/koz*) to temporal closeness.

Keyword: temporal reference, conceptual metaphor, grammaticalization, adjectives, asymmetry

受領日 2024年10月11日
受理日 2025年1月20日